

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果と分析について

1 目的

- (1) 2025年4月17日(木)に実施した「令和7年度 全国学力・学習状況調査」における町田市の調査結果を分析し、教育施策の成果と課題を検証して改善を図る。(※中学理科は2025年4月14日～17日実施)
- (2) 学校における児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善を図る。
- (3) 教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 主な内容

- (1) 令和7年度 全国学力・学習状況調査
 - ① 調査結果(教科別平均正答率、結果の分析と授業改善のポイント)
 - ② 質問紙調査結果(児童生徒質問紙及び学校質問紙の結果の分析と今後の取組について)
 - ③ 質問紙調査と教科別平均正答率とのクロス集計結果
- (2) 調査結果分析に基づく町田市教育委員会の取組

3 活用方法

- (1) 各学校において、本資料を参考に調査結果を分析し、授業改革推進プランを作成するとともに、全教員が実施する町田市スタンダード授業改革シートを活用した授業分析を行い、日々の授業改善を図る。
- (2) 教育委員会において、本調査結果と、市独自のMNE実施状況調査等を関連付けて分析し、今後の研修内容や授業改革推進施策の取組の改善及び充実を図る。
- (3) 学習習慣の確立及び家庭学習の推進を図るために、保護者・地域に周知する。
- (4) 組織的な授業改善のPDCAサイクル化を図るために、定例校長会や定例副校長会、教務主任会や研究主任会、若手教員育成研修やICT活用研修等で周知する。
- (5) 町田市ホームページ「まちだ子育てサイト」において、結果と分析について公開し、町田市教育委員会の取組の周知を図る。

4 配布及び公開

- (1) 各学校で分析した結果を、学校だより等で保護者に周知する。
- (2) 町田市教育委員会で分析した結果を、町田市立小・中学校の管理職及び教員に配布する。
- (3) 町田市教育委員会で分析した結果を、町田市ホームページ「まちだ子育てサイト」において公開する。

「令和7年度全国学力・学習状況調査」の結果と分析について

令和7年度 全国学力・学習状況調査

1 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を分析し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善・充実等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 対象 小学校6年生、中学校3年生

3 実施日 2025年4月17日(木) ※中学理科は4月14日～17日実施

4 調査内容

- 教科に関する調査(国語、算数・数学・理科)※中学理科はオンライン実施(MEXCBT)
- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - ◆児童生徒に対する調査
 - ・学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査
 - ◆学校に対する調査
 - ・指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

5 学力調査結果

(1) 教科別平均正答率(全国より上回っているもの、下回っているもの)

【小学校】

		国語	算数	理科
平均 正答率	町田市	66.0	58.0	55.0
	全国	67.8	58.0	57.1
	東京都	70.0	64.0	60
割合 ※	町田市	97	100	96
	東京都	103	110	105

○国語は、全国より1.8ポイント、東京都より4ポイント下回っている。
○算数は、全国と同じ。東京都より6ポイント下回っている。
○理科は、全国より2.1ポイント、東京都より5ポイント下回っている

※ 全国を100とした時の割合

経年変化		国語			算数		
		R5	R6	R7	R5	R6	R7
割合 ※	町田市	96	97	97	99	96	100
	東京都	102	103	103	107	105	110

【中学校】

		国語	数学	※理科
平均 正答率 <small>※理科についてはIRTスコアを記載</small>	町田市	56.0	50.0	50.7
	全国	54.3	48.3	50.6
	東京都	57.0	53.0	50.5
割合 ※	町田市	103	103	103
	東京都	105	109	100

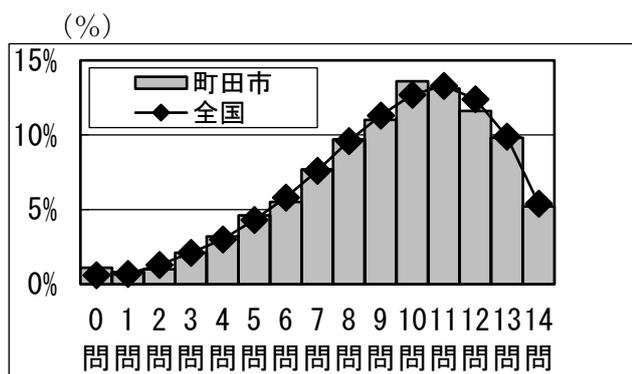
○国語は、全国より1.7ポイント上回っているが、東京都より1ポイント下回っている。
○数学は、全国より1.7ポイント上回っているが、東京都より3ポイント下回っている。
○理科のIRTスコアは全国、東京よりも上回っている。

経年変化		国語			数学		
		R5	R6	R7	R5	R6	R7
割合 ※	町田市	100	103	103	101	104	103
	東京都	103	104	105	105	108	109

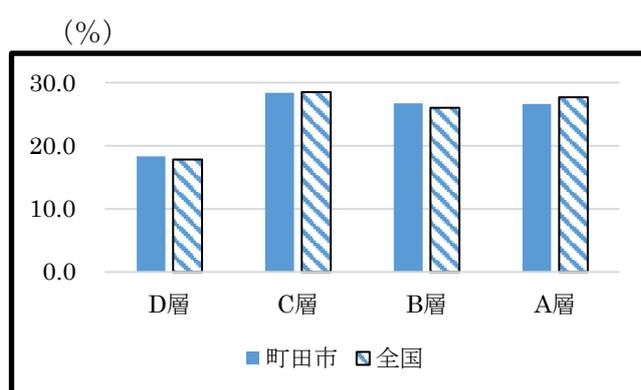
(2) 小学校

①国語

【正答数分布グラフ】(横軸：正答数, 縦軸：割合)



【四分位の正答数内訳】



【観点別の平均正答率】

※全国より上回っているもの、下回っているもの (3ポイント以上の差があるものは色を濃く表示)

評価の観点・学習指導要領の内容、領域等		問題数	平均正答率 (%)		
			町田市	全国	東京都
		14	66.0	66.8	70.0
知識・技能	言葉の特徴や使い方に関する事項	2	73.7	76.9	77.9
	情報の扱い方に関する事項	1	62.6	63.1	66.9
	我が国の言語文化に関する事項	1	81.5	83.8	81.2
思考・判断・表現	話すこと・聞くこと	3	66.9	66.3	69.9
	書くこと	3	69.5	69.5	72.4
	読むこと	4	56.6	57.5	61.0

【問題ごとの平均正答率】

問題番号	出題の趣旨	平均正答率 (%)		
		町田市	全国	東京都
1一	目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる	55.2	53.3	58.0
1二	情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかをみる	62.6	63.1	66.9
1三(1)	自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかどうかをみる	71.7	71.8	75.3
1三(2)	話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	73.8	73.7	76.3
2一	書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をついたり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考慮することができるかどうかをみる	64.9	65.5	69.7
2二	図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	83.9	81.8	85.5
2三	目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	59.9	61.3	62.1
2四ア	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる	80.0	81.6	83.7
2四イ		67.4	72.1	72.1
3一	時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができるかどうかをみる	81.5	81.2	83.8
3二(1)	時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができるかどうかをみる	80.5	81.6	84.2
3二(2)	事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる	52.1	51.3	56.2
3三(1)	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる	41.9	40.8	47.0
3三(2)		52.0	56.3	56.5

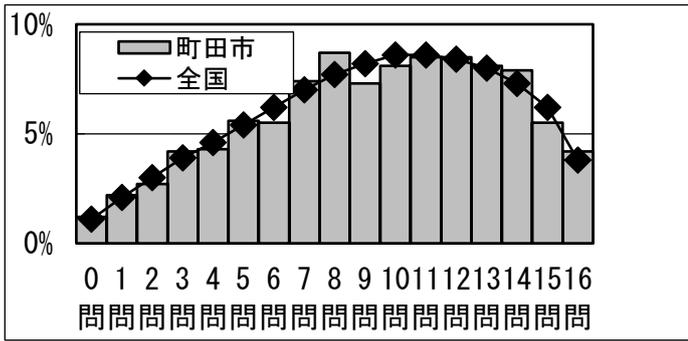
【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

- 四分位の正答数内訳では、D層の割合が全国よりも高く、A層の割合は全国より低い。
- 言葉の特徴や使い方に関する事項では全国より3ポイント程度低い。
- 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる問題では全国より5ポイント程度低く、最も差が大きい部分である。
- 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる記述式の問題においては、全国より約3ポイント低く、さらに無回答率が21.4%と高く記述への抵抗感が見える。
- 図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題では、全国より2ポイント高い。

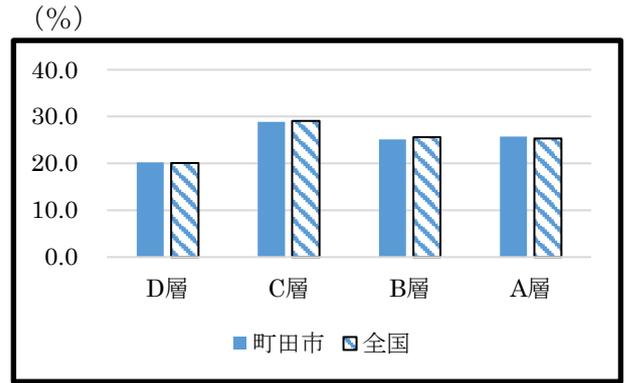
- 教科書の内容を図や表で整理する活動や、意見文・説明文に図表を書き加える活動を設けることで、児童の論理的思考力と表現力をさらに伸ばす。
- 漢字を「使う場面」や「意味の違い」に着目させる活動を通じて、漢字の活用力を高める。
- 記述力の向上に向け、語彙を増やす活動を取り入れたり、「一文だけ書く」「三語で答える」など、ハードルを下げた記述練習を取り入れたりし、児童が安心して書ける環境を整える。ペアでの意見交換や、書いた内容の共有も有効。
- 言葉の特徴や使い方の理解を深めるために主語・述語の関係や語句の役割に着目した活動（例：文の並べ替え、文の分解）を通じて、文の構造を意識させる指導を行う。

②算数

【正答数分布グラフ】（横軸：正答数，縦軸：割合）
（％）



【四分位の正答数内訳】



【観点別の平均正答率】

※全国より上回っているもの、下回っているもの（3ポイント以上の差があるものは色を濃く表示）

評価の観点	問題数	平均正答率（％）		
		町田市	全国	東京都
	16	58.0	58.0	64.0
知識・技能	9	66.2	65.5	70.9
思考・判断・表現	7	47.5	48.3	54.4

【問題ごとの平均正答率】

問題番号	出題の趣旨	平均正答率（％）		
		町田市	全国	東京都
1（1）	棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができるかどうかをみる	79.6	78.7	85.0
1（2）	目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる	26.4	31.0	34.0
1（3）	簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができるかどうかをみる	73.4	71.6	76.6
1（4）	示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算することができるかどうかをみる	75.9	74.5	78.9
2（1）	平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかをみる	54.4	58.3	61.4
2（2）	台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる	50.9	50.2	56.7
2（3）	角の大きさについて理解しているかどうかをみる	82.1	79.3	83.3
2（4）	基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる	34.7	37.0	43.5
3（1）	小数の加法について、数の相対的な大きさをを用いて、共通する単位を捉えることができるかどうかをみる	78.1	74.1	80.8
3（2）	分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる	21.7	23.0	29.7
3（3）	数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる	41.9	35.0	45.8
3（4）	異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる	75.4	81.3	83.4
4（1）	伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかをみる	81.6	82.8	86.9
4（2）	伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる	46.0	48.7	55.5
4（3）	はかりの目盛りを読むことができるかどうかをみる	60.3	60.9	65.5
4（4）	「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる	46.1	40.9	52.3

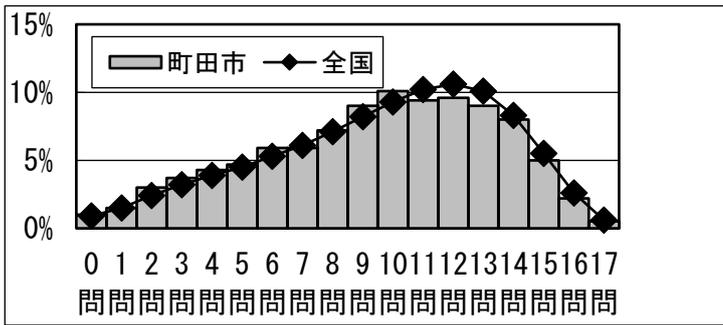
【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

- 四分位の正答数内訳では、全国と比較しA層の割合が全国よりやや高く、D層の割合は全国と同程度。
- 全体の平均正答率は全国と同水準だが、東京都より6ポイント低い
- 領域別では「数と計算」が最も高く全国平均を上回る。「測定」「図形」でやや低く、全国平均も下回っている。
- 「知識・技能」は全国を上回るが、「思考・判断・表現」は全国よりも低い。
- 問題形式別では「記述式」の正答率が低い。
(町田市：32.2%、全国：34.9%、東京都：40.7%)

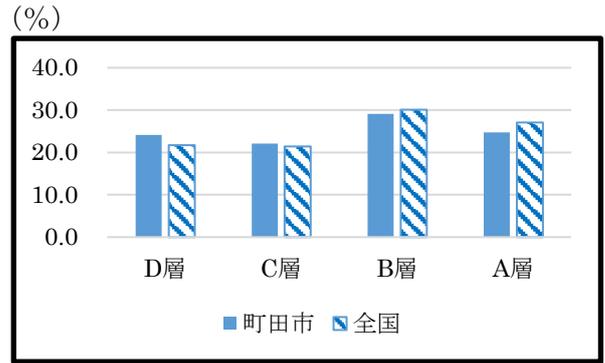
- 児童が自分の考えを数学的に説明できる力を育てるために、導入を工夫し問題解決の見通しを立てたり、解決の過程や結果を振り返ったりする活動を授業の中に意図的に取り入れることが重要である。
- 図形や測定の理解を深めるためには、児童が実際に図形を描いたり、切ったり、組み立てたりする操作活動や、測定器具を用いた体験的な学習を通して、抽象的な概念を具体的に捉えられるようにすることが求められる。
- 思考力や判断力を育てるためには、児童に対して「なぜそうなのか」「どうしてその方法を選んだのか」といった問いかけを行い、答えだけでなくその理由や根拠を言語化する場면을意図的に設けることが効果的である。
- 問題解決力を高めるためには、複数の解法を比較したり、それぞれの方法の良さや効率性について話し合ったりする活動を通して、児童が多様な視点から考える力を養うことが大切である。
- 記述式問題への対応力を育てるためには、選択式から短答式、そして記述式へと段階的に練習を重ね、児童が式や言葉で自分の考えを表現する力を無理なく身につけられるようにすることが望ましい。

③理科

【正答数分布グラフ】（横軸：正答数，縦軸：割合）
（%）



【四分位の正答数内訳】



【観点別の平均正答率】

※全国より上回っているもの、下回っているもの（3ポイント以上の差があるものは色を濃く表示）

評価の観点	問題数	平均正答率（%）		
		町田市	全国	東京都
		17	55.0	57.1
知識・技能	8	52.8	55.3	57.5
思考・判断・表現	9	57.8	58.7	61.2

【問題ごとの平均正答率】

問題番号	出題の趣旨	平均正答率（%）		
		町田市	全国	東京都
1（1）	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる	80.1	79.5	82.3
1（2）	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる	55.1	60.5	59.8
1（3）	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができるかどうかをみる	77.7	77.8	80.8
2（1）	身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる	10.3	10.6	12.8
2（2）	電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる	42.7	42.9	46.8
2（3）	電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いているかどうかをみる	77.0	78.0	80.6
2（4）	乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いているかどうかをみる	45.3	55.1	59.3
3（1）	ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる	62.5	70.7	69.7
3（2）	顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いているかどうかをみる	45.9	45.6	47.3
3（3）	発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる	58.3	62.0	66.0
3（4）	レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができるかどうかをみる	30.0	29.9	33.4
4（1）	水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるかどうかをみる	51.8	50.6	49.9
4（2）	水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる	62.4	64.2	64.8
4（2）	水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる	57.5	57.5	62.8
4（3）	水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる	60.0	59.8	63.7
4（3）	氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかどうかをみる	61.3	60.9	63.9
4（3）	「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる	64.1	65.6	68.0

【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

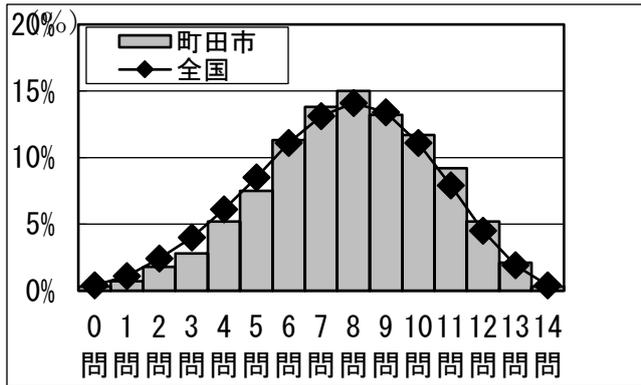
- 四分位の正答数内訳では、全国と比較しA層・B層の割合が全国より低く、C層・D層の割合は全国より高い。
- 全体の平均正答率は全国より2.1ポイント低く、東京都との差は5ポイントある。
- 領域別では「地球」が最も高く、「エネルギー」が最も低い。いずれも全国、都の平均を下回っている。
- 「思考・判断・表現」の観点では全国より0.9ポイント低く、東京都との差は3.4ポイントある。
- 問題形式別では「記述式」の正答率が最も低く、全国より2.7ポイント低い(町田市:42.5%、全国:45.2%、東京都:46.6%)

- 児童が実験の目的や方法を自分の言葉で説明できるようにするために、観察や実験の前後に「なぜこの方法なのか」「何が分かるのか」を話し合う時間を設けることが重要である。
- 電気や熱などの物理的な概念を理解させるためには、身近な現象との関連付けを図りながら、操作活動やモデル図を用いた視覚的な説明を取り入れることが効果的である。
- 実験結果をもとに予測や考察を行う力を育てるためには、結果を比較したり、条件を変えた場合の予想を立てたりする活動を通じて、論理的な思考を促すことが求められる。
- 記述式問題への対応力を高めるためには、児童が自分の考えを文章で表現する場面を日常的に設け、まずは短い文から始めて徐々に理由や根拠を含めた説明へと発展させる指導が望ましい。

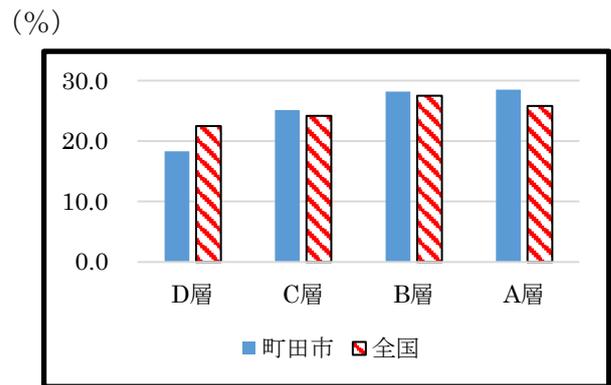
(3) 中学校

①国語

【正答数分布グラフ】(横軸：正答数, 縦軸：割合)



【四分位の正答数内訳】



【観点別の平均正答率】

※全国より上回っているもの、下回っているもの (3ポイント以上の差があるものは色を濃く表示)

評価の観点・学習指導要領の内容、領域等		問題数	平均正答率 (%)		
			町田市	全国	東京都
		14	56.0	54.3	57
知識・技能	言語の特徴や使い方に関する事項	2	48.8	48.1	51.7
	情報の扱い方に関する事項	0			
	我が国の言語文化に関する事項	0			
思考・判断・表現	話すこと・聞くこと	4	55.3	53.2	55.0
	書くこと	5	54.9	52.8	56.5
	読むこと	3	64.3	62.3	65.0

【問題ごとの平均正答率】

問題番号	出題の趣旨	平均正答率 (%)		
		町田市	全国	東京都
1一	文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる	37.0	35.2	40.6
1二	目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる	86.2	82.5	86.4
1三	書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかどうかをみる	65.9	63.3	67.4
1四	自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる	32.4	31.0	34.0
2一	資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる	40.1	38.1	38.8
2二	相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる	82.2	77.9	80.8
2三	自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することができるかどうかをみる	75.1	73.4	76.9
2四	資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる	23.7	23.2	23.7
3一	表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	84.0	80.0	83.3
3二	文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができるかどうかをみる	91.5	89.9	90.7
3三	事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる	60.6	61.0	62.8
3四	文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	17.3	17.1	20.9
4一	読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる	56.2	57.3	60.4
4二	読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる	33.6	30.1	34.2

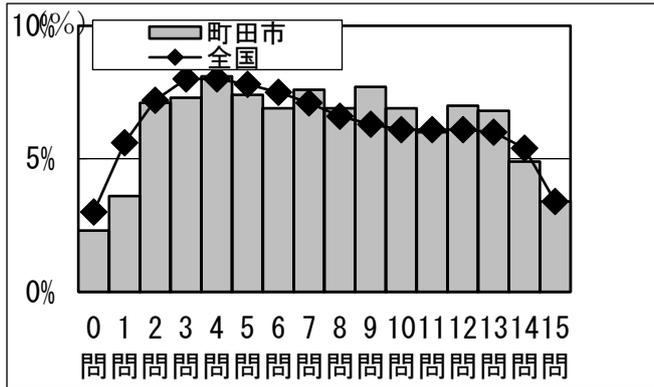
【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

- 四分位の正答数内訳では、A層及びB層の割合が全国よりも高い。
- 全体の平均正答率は全国より1.7ポイント高い。
- 領域別では「読むこと」が最も高い（町田市：64.3%、全国：62.3%）、一方で「言葉の特徴や使い方」はやや低め（町田市：48.8%、全国：48.1%）
- 「思考・判断・表現」の観点では全国より2ポイント高い。
- 問題形式別では「記述式」の正答率が他の形式と比較すると低い。（町田市：26.8%、全国：25.3%、東京都：28.2%）

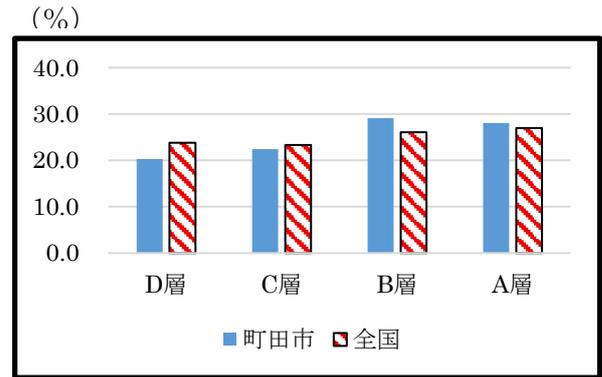
- 言語活動の中で言葉の特徴などに気付かせることや、学習したことを話したり聞いたり書いたり読んだりする場面に生かせるようにすることを意識しながら指導することが重要である。
- 短歌や俳句などを読み味わう際には、描写などに着目させ、心情や情景を想像しながら読ませることが大切であり、そのことによって深い理解や感動が得られるようにする。その際、細部の描写にも着目しながら、物事の様子や場面などを丁寧に捉えることができるように指導することが重要である。
- 話すこと・聞くことの力を伸ばすために、発表や話し合いの場面で「目的に応じた構成」や「聞き手への配慮」を意識させる活動を取り入れ、表現の工夫を促すことが望ましい。
- 図表や写真などを含む説明的な文章を読む際には、示されている図表などが、文章のどの部分と関連しているのかを確認するなどして、書き手の伝えたい内容をより正確に読み取ること、図表などを示すことで文章にどのような効果が生まれているのかを考えるよう指導する。

②数学

【正答数分布グラフ】（横軸：正答数，縦軸：割合）



【四分位の正答数内訳】



【観点別の平均正答率】

※全国より上回っているもの、下回っているもの（3ポイント以上の差があるものは色を濃く表示）

評価の観点	問題数	平均正答率（％）		
		町田市	全国	東京都
	15	50.0	48.3	53.0
知識・技能	9	55.9	54.4	58.3
思考・判断・表現	6	42.1	39.1	45.4

【問題ごとの平均正答率】

問題番号	出題の趣旨	平均正答率（％）		
		町田市	全国	東京都
1	素数の意味を理解しているかどうかをみる	35.9	31.8	35.8
2	数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる	51.4	51.9	56.9
3	多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる	56.5	58.1	58.9
4	一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、 x の増加量に対する y の増加量を求めることができるかどうかをみる	32.3	34.7	38.1
5	相対度数の意味を理解しているかどうかをみる	42.0	42.5	47.6
6	事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができるかどうかをみる	68.0	62.8	67.5
6	式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる	29.9	25.7	32.7
6	目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる	49.3	45.2	52.5
7	必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる	81.2	77.4	81.1
7	不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる	56.9	55.9	60.4
8	事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる	73.3	71.9	75.2
8	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる	38.6	38.0	43.9
9	証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができるかどうかをみる	63.0	58.5	63.6
9	統一的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる	42.6	36.3	44.0
9	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる	35.5	33.2	39.1

【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

- 四分位の正答数内訳では、A層及びB層の割合が全国よりも高い。
 - 全体の平均正答率は全国より1.7ポイント高い
 - 領域別では「データの活用」が最も高い（町田市：60.1%、全国：58.6%）、一方で「関数」はやや低め（町田市：48.1%、全国：48.2%、東京都：52.4%）
 - 「思考・判断・表現」の観点では全国より3ポイント高い
 - 問題形式別では「記述式」の正答率が最も低い。（選択式：57.4%、短答式：53.4%、記述式：42.1%）
-
- 記述力の育成には「考え方を言語化する場面」を日常的に設け、式だけでなく理由や根拠を説明する活動を重視することが重要である。
 - 関数領域の理解を深めるためには、グラフや表を用いた視覚的なアプローチや、実生活の事象と関連付けた課題設定を通じて、抽象的な概念を具体化する工夫が求められる。
 - 「データの活用」の強みを活かし、統計的な問題を通じて、数学が社会とつながっていることを実感させる授業展開を行うことで、学習意欲の向上につながる。
 - 無解答率の高い記述式問題には、段階的な指導（例：選択→短答→記述）を通じて、書くことへの抵抗感を減らし、自信を持って表現できるようにする指導が必要である。

③理科 ※オンライン実施 (MEXCBT)

IRTとは何か

IRTとは

IRTとは、国際的な学力調査 (PISA、TIMSSなど) や英語資格・検定試験 (TOEIC・TOEFLなど) で採用されているテスト理論です。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし (尺度) で比較できます。

IRT (Item Response Theory : 項目反応理論)
児童生徒の正答・誤答が、問題の特性 (難易度、測定精度) によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。

素点方式 (正答数・正答率)

得点(スコア)の表現方法: 何個のランドルト環 (C) を見ることができたか

得点(スコア)の例:
Aさん: 5問/7問 (正答率71%)
Bさん: 4問/7問 (正答率57%)

素点方式の場合、Aさんの方が正答数 (見ることができたランドルト環の数) ・正答率が高くなります。

IRT方式

得点(スコア)の表現方法: どの大きさのランドルト環 (C) を安定的に見ることができたか

得点(スコア)の例:
Aさん: 0.2
Bさん: 0.3

IRT方式の場合、Bさんの方がスコア (視力) が高くなります。

全国学力・学習状況調査にIRTを導入するメリット

- ① 調査日の複数設定が可能になる。各児童生徒が異なる問題を解く設計ができる。
- ② 今まで以上に多くの問題を使用し、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
- ③ 学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できる。

令和7年度調査「中学校理科」の問題の構成

問題構成について

- 生徒1人あたり、公開問題10問と非公開問題16問を出題しています。
- 公開問題には全日程に共通する問題と実施日別の問題があります。
- 非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いています。

公開問題

全日程に共通する問題: 6問

実施日により異なる問題: 4問

非公開問題

生徒ごとに異なる問題: 16問

6問 + 4問 + 16問 = 26問 (生徒一人が解く問題数)

「中学校理科」IRT分析の結果

IRTスコア全国結果

	平均IRTスコア	第3四分位	第2四分位	第1四分位	標準偏差
全国(国公私)	505(※1)	573.9	495.8	423.2	124.6(※2)

(※1) IRT分析では500を基準として各生徒のスコアをそれぞれ算出しています。平均IRTスコアは、算出された各生徒のスコアを足し合わせて平均をとったものであるため、500に一致するとは限りません。

(※2) 理想的な正規分布(データが平均の付近に集積するよう分布)となった場合、標準偏差は100となりますが、実際の各生徒のスコア状況により変動します。

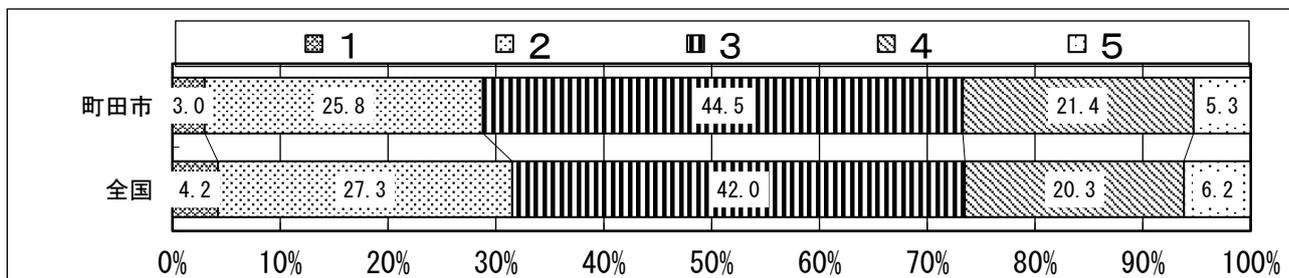
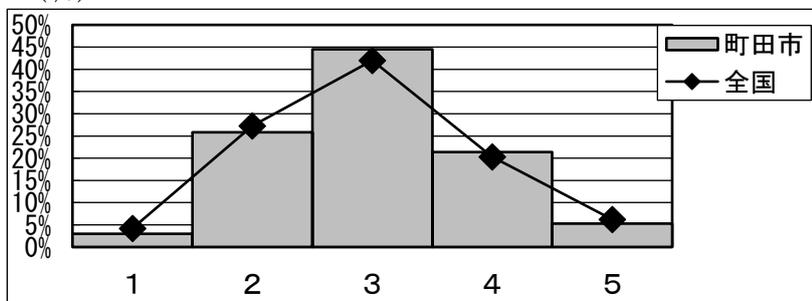
IRTバンド全国結果

IRTバンド	1	2	3	4	5
IRTスコア換算(※3)	~317	318~442	443~567	568~691	692~
割合(%) (※4)	4.1	27.0	42.0	20.5	6.4

(※3) IRTバンドの区切り方は、生徒ごとに算出したIRTスコアを、等間隔に決められた幅に区切って設定しています。今回のIRTスコアの標準偏差124をバンド幅としており、2回目以降の理科でも、同じ基準を用いる予定です。

(※4) IRTバンドについて、理想的な正規分布となった場合、3が約40%、2・4が約23%、1・5が約7%となりますが、実際の各生徒のスコア状況により変動します。

【IRTバンド分布グラフ】(横軸: IRTバンド, 縦軸: 割合)
(%)



町田市は全国・東京都と比較して、平均IRTスコアが高く、下位層の割合が少ない。中間層 (バンド3・4) が充実しており、学力の底上げが進んでいる。上位層 (バンド5) の割合は全国よりやや低い。

【問題ごとの平均正答率】

	出題の趣旨	問題の 難易度	平均正答率 (%)		
			町田市	全国	東京都
1(1)	電熱線で水を温める学習場面において、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	5	54.4	51.9	52.0
1(2)	身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる★	5	44.3	46.2	45.9
1(3)	露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈できるかどうかをみる	5	35.0	36.2	36.9
1(4)	水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる	5	33.8	29.7	31.1
1(5)	塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる★	4	49.3	44.9	47.3
1(6)	科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる★	3	80.6	79.4	80.3
2(1)	【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できるかどうかをみる	5	13.4	14.0	14.9
2(2)	ストローの太さと音の高低に関する情報を収集してまとめを行う学習活動の場で、収集する資料や情報の信頼性についての知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	2	95.7	94.6	95.6
3(1)	仮説を立てて科学的に探究する学習場面において、電気回路に関する知識及び技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想することができるかどうかをみる	5	35.1	34.9	35.1
3(2)	身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる	2	87.1	85.2	86.8
4(1)	ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できるかどうかをみる★	4	46.1	50.4	51.5
4(2)	火災における適切な避難行動を問うことで、気体の性質に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる★	2	95.6	92.8	95.3
5(1)	加熱を伴う実験における実験器具の操作等に関する技能が身に付いているかどうかを見る★	1	93.2	93.0	93.5
5(2)	化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる★	4	35.6	35.6	38.1
6(1)	スケッチから分かることを問うことで、スケッチに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	4	68.0	65.9	67.1
6(2)	スケッチから分かる植物の特徴を基に、植物の葉、茎、根のつくりに関する知識及び技能を活用して、植物の茎の横断面や根の構造について適切に表現できるかどうかをみる	4	37.5	41.9	39.5
7(1)	小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造について学習する場面において、共通性と多様性を見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することができるかどうかをみる	5	37.6	34.8	36.0
7(2)	分解に関する身近な事象を問うことで、これまでに学習した理科の知識及び技能を基に、化学変化の分解の知識が概念として身に付いているかどうかをみる★	5	43.3	51.6	48.8
8(1)	地域の言い伝えを科学的に探究する学習場面において、大地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうかをみる	4	45.6	42.2	43.2
8(2)	大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がりを検討して表現できるかどうかをみる	5	22.0	18.1	19.0
9(1)	気圧について科学的に探究する場面において、状態変化や圧力に関する知識及び技能を基に、予想が反映された振り返りについて問うことで、探究の過程の見通しについて分析して解釈できるかどうかをみる	5	32.8	31.8	33.7
9(2)	気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いているかどうかをみる	4	68.8	58.1	62.4

【分析（○）と授業改善のポイント（●）】

- 正答率は全国平均とほぼ同じ
- 領域別のばらつきが大きく、粒子を柱とする領域（出題の趣旨に★マーク）に課題がある。
- 記述式問題の無解答率が高く、表現力の育成が課題である。

- 粒子を柱とする領域の理解にばらつきがあるため、モデル図や実験動画などを活用し、抽象的な概念を具体化する工夫が必要である。
- 思考・判断・表現を問う問題が多いため、実験結果の考察や予測、理由の説明などを日常的に行う活動を取り入れ、論理的思考力を育てることが重要である。
- 記述式問題への対応力を高めるためには、短答式から記述式へと段階的に練習を重ね、市とが言葉で自分の考えを表現する力を無理なく身につけられるようにすることが望ましい。
- 無解答率の高い設問では、書くことへの安心感を育てる指導が必要であり、ペアでの話し合いや考えの説明を経て記述に移る流れが効果的である。

6 質問調査結果

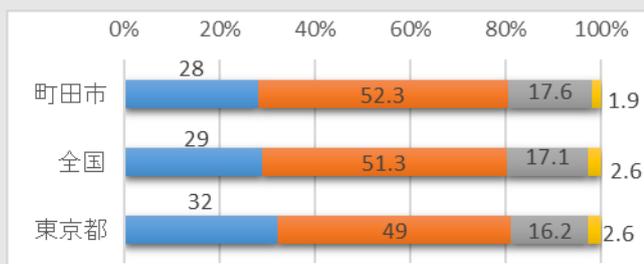
(1) 児童生徒質問調査 【「学び続ける力」に関する項目】

①自分の考えをもち、行動できる。(挑戦・自己理解)

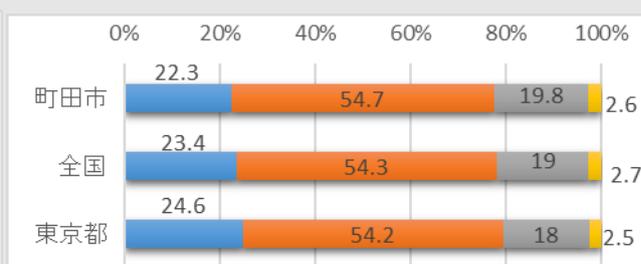
1. 小学校5年生、中学校1,2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

※左から児童・生徒の回答内容「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の順に並んでいる。

【小学校】

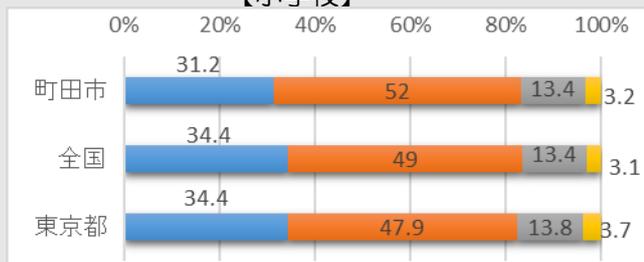


【中学校】



2. 小学校5年生、中学校1,2年生までに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか

【小学校】



【中学校】

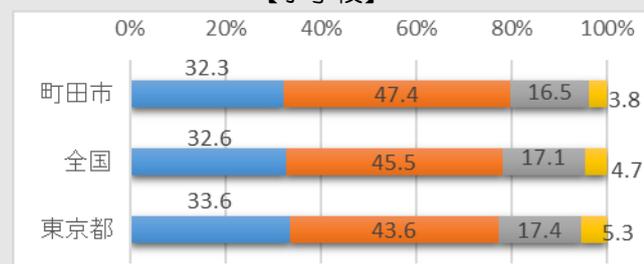


②他者とのかかわりの中で、学びを得ることができる。(他者受容・協調性)

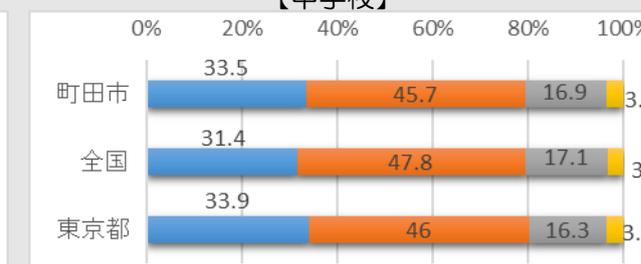
3. 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか

※左から児童・生徒の回答内容「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の順に並んでいる。

【小学校】

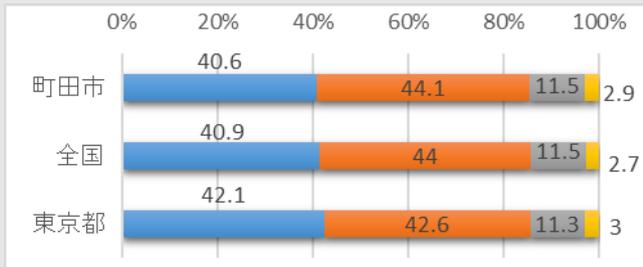


【中学校】

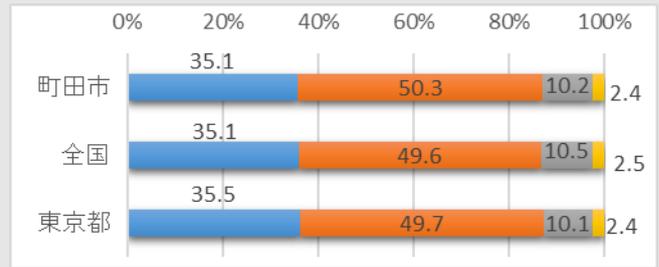


4. 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか

【小学校】



【中学校】



③学習内容や学習過程を振り返り、前向きに次の学習に取り組むことができる。(ポジティブ・粘り強さ)

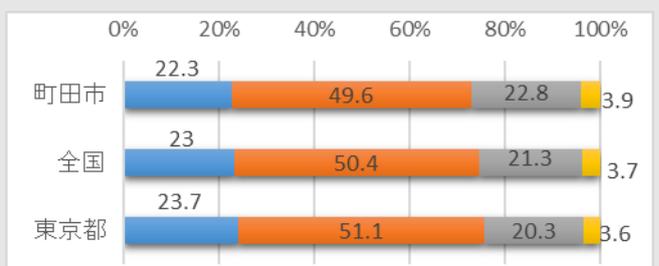
5. 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか

※左から児童・生徒の回答内容「**当てはまる**」「**どちらかといえば当てはまる**」「**どちらかといえば当てはまらない**」「**当てはまらない**」の順に並んでいる。

【小学校】



【中学校】



6. 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか

【小学校】



【中学校】



学習指導要領の趣旨を踏まえた取組

◆ 昨年度までと同様、約80%の児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと考えている。

課題の解決に向けて自分から取り組んだ

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
 □ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

小学校 80.3

中学校 77.8



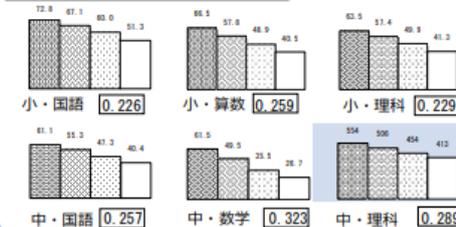
◆ 「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと考える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向。

児童生徒質問「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」の選択肢ごとの教科の正答率・スコア

課題の解決に向けて自分から取り組んだ

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
 □ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

選択肢ごとの教科の平均正答率・スコア



※「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」以外の「主体的・対話的で深い学び」に関する回答でも同様の傾向。

(2) 学校質問調査 【「学び続ける力」に関する項目】

※左から学校の回答内容「**そう思う**」「**どちらかといえば、そう思う**」「**どちらかといえば、そう思わない**」「**そう思わない**」の順に並んでいる。

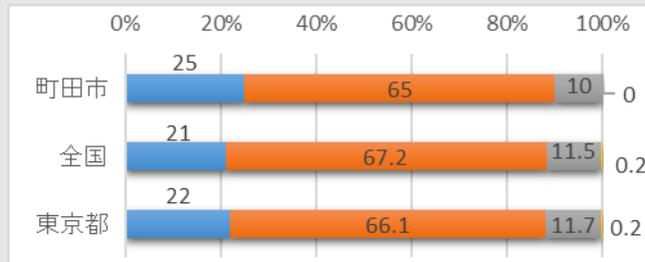
①自分の考えをもち、行動できる。(挑戦・自己理解)

1. 調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

【小学校】



【中学校】

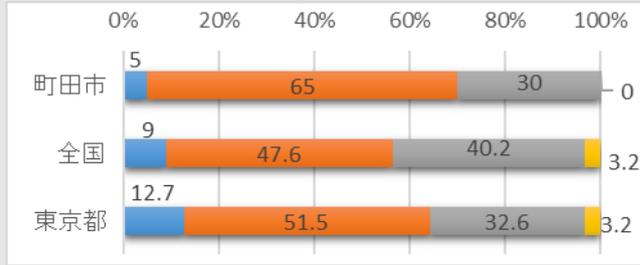


2. 調査対象学年の児童生徒は、授業では、自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っていると思いますか

【小学校】



【中学校】

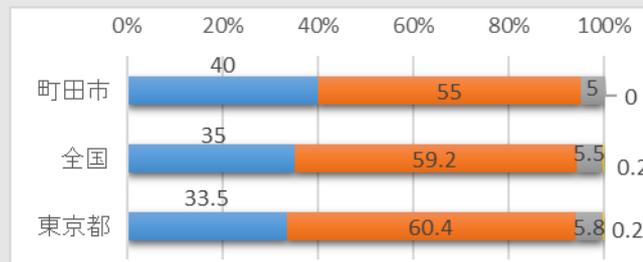


②他者とのかかわりの中で、学びを得ることができる。(他者受容・協調性)

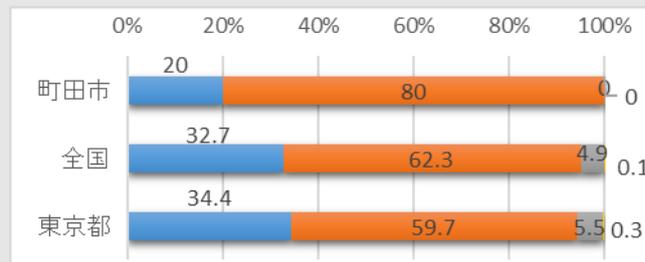
3. 調査対象学年の児童に対して、前年度までに、学習指導において、児童が、それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫しましたか。

※左から学校の回答内容「**よく行った**」「**どちらかといえば、行った**」「**あまり行わなかった**」「**全く行わなかった**」の順に並んでいる。

【小学校】

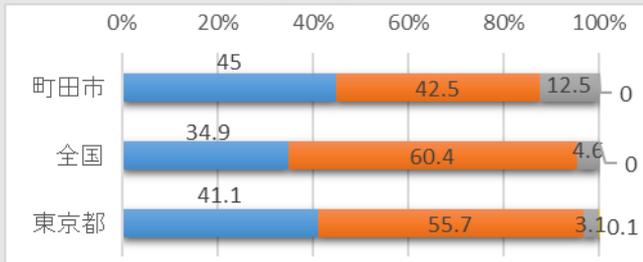


【中学校】



4. 調査対象学年の児童は、授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいると思いますか

【小学校】



【中学校】



③学習内容や学習過程を振り返り、前向きに次の学習に取り組むことができる。(ポジティブ・粘り強さ)

5. 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか

【小学校】

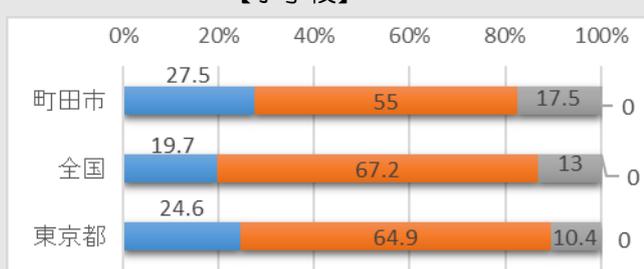


【中学校】

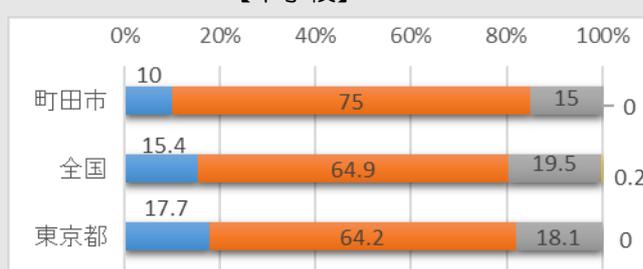


6. 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか

【小学校】



【中学校】



【分析 (○) と今後について (●)】

【児童生徒質問調査】

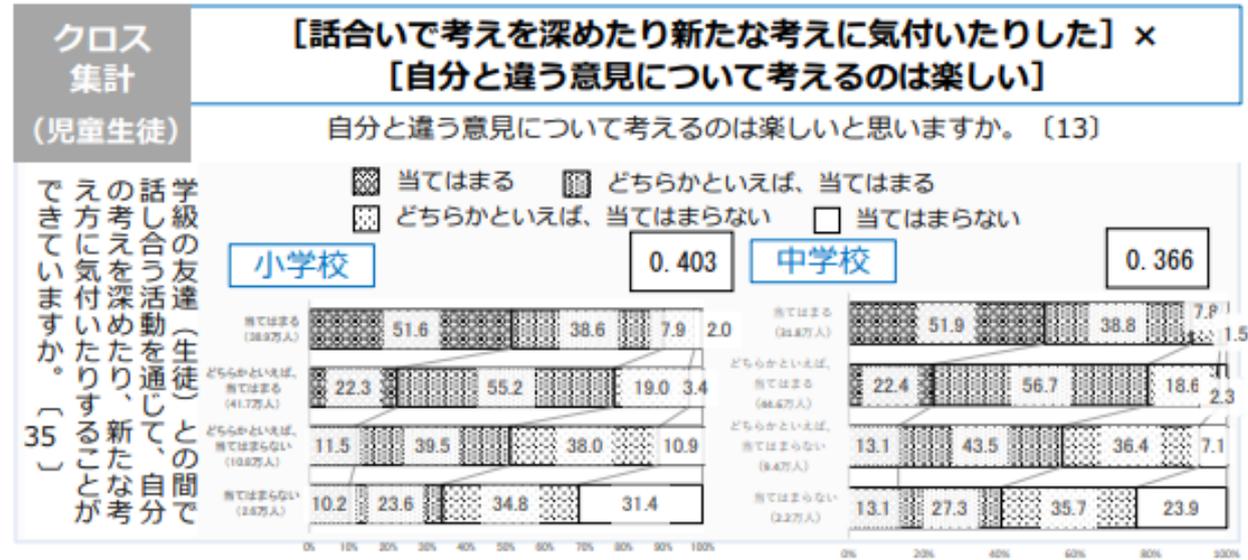
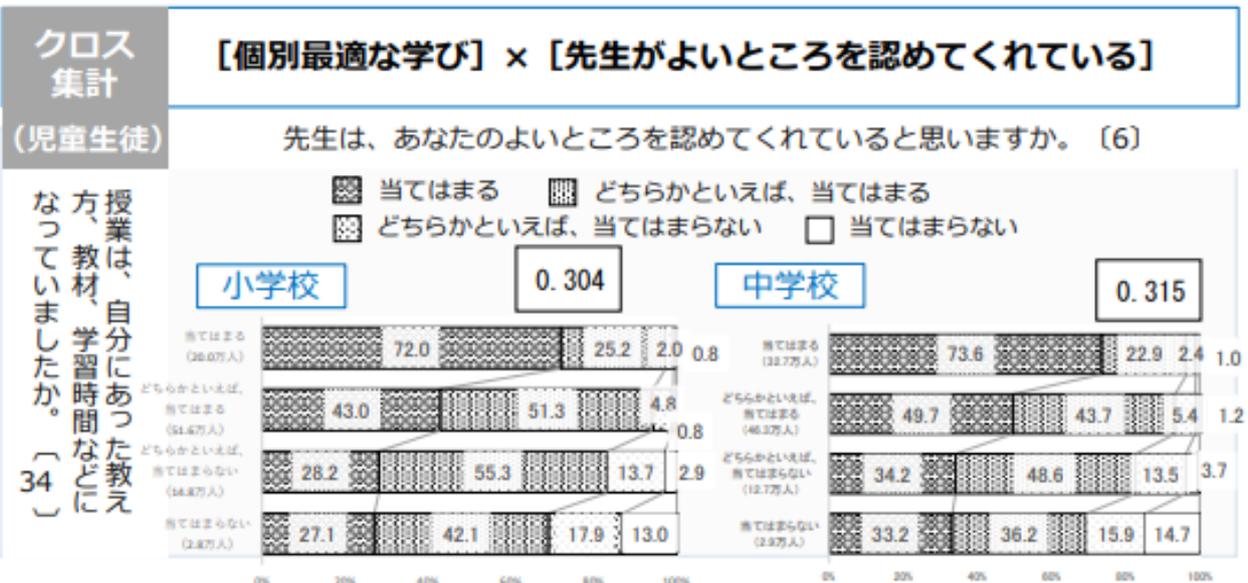
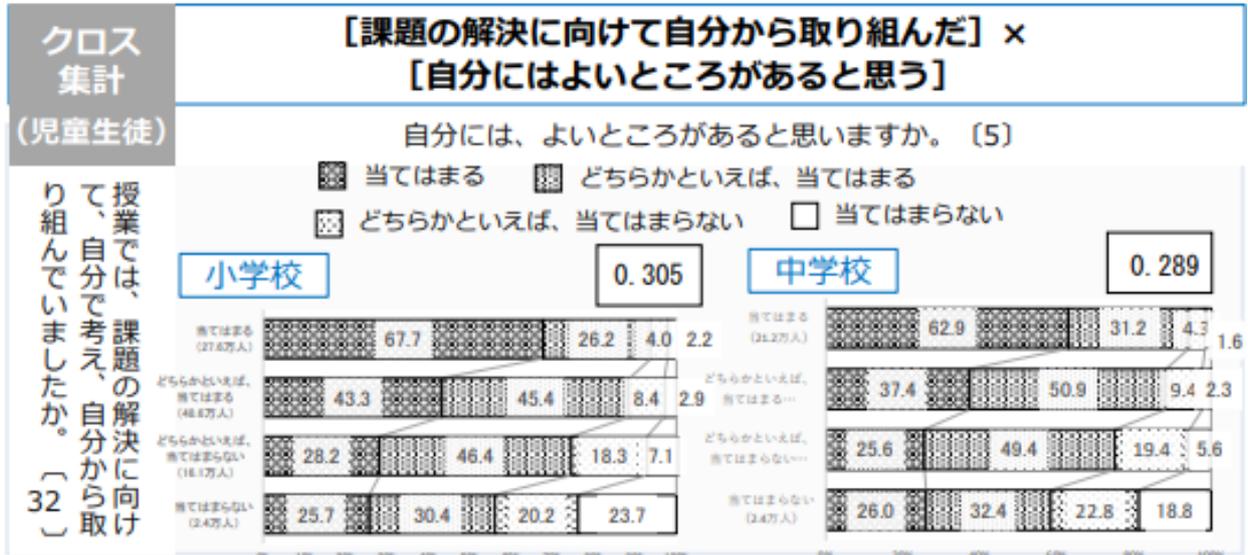
- ①自分の考えをもち、行動できる。(挑戦・自己理解)については、どの項目も肯定的回答の割合は、全国や都と同程度である。
- ②他者とのかかわりの中で、学びを得ることができる。(他者受容・協調性)の項目においては、いずれも小：中学校の肯定的回答の割合は全国や都より高い。
- ③学習内容や学習過程を振り返り、前向きに次の学習に取り組むことができる。(ポジティブ・粘り強さ)の項目において小学校は全国や都と同程度。中学校は肯定的回答が全国や都よりやや低い。

【学校質問調査】

- ①自分の考えをもち、行動できる。(挑戦・自己理解)については、小学校の肯定的回答は全国や都よりやや低く、中学校は全国や都より高い。
- ②他者とのかかわりの中で、学びを得ることができる。(他者受容・協調性)について、中学校で肯定的回答が100%となっている。
- ③学習内容や学習過程を振り返り、前向きに次の学習に取り組むことができる。(ポジティブ・粘り強さ)の項目において小学校は肯定的回答が全国や都とよりやや低く、中学校はほぼ同程度か、やや高い結果となっている。
- クロス集計でも明らかになっているように、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと考える児童・生徒ほど各教科の正答率・スコアが高いことから、各項目に挙げられているような内容を意識した授業改善を常に図っていくことが大切である。
- 習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を行うことで、基礎的学力の定着と応用力の向上を図っていく。

※右上の数値は相関係数で、1.0に近づくほど正の相関（片方が上がるともう片方も上がる）があるとされています。

「主体的・対話的で深い学び」×ウェルビーイング



クロス集計

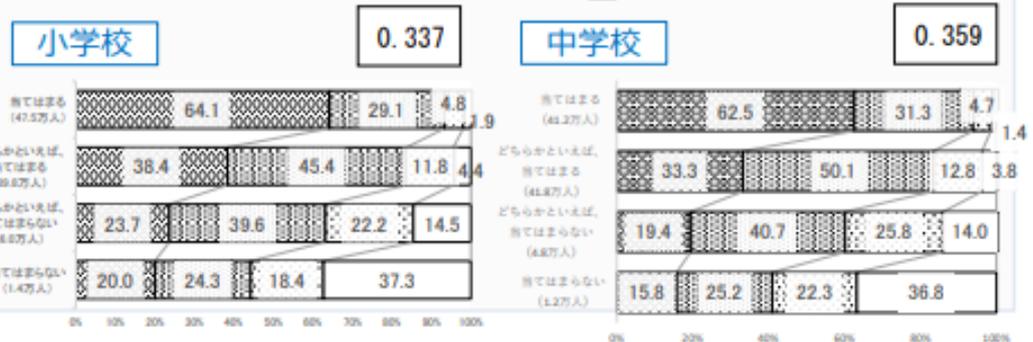
(児童生徒)

【協働的な学び】 × 【学校に行くのは楽しい】

学校に行くのは楽しいと思いますか。〔12〕

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない

授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にしながら、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。〔39〕

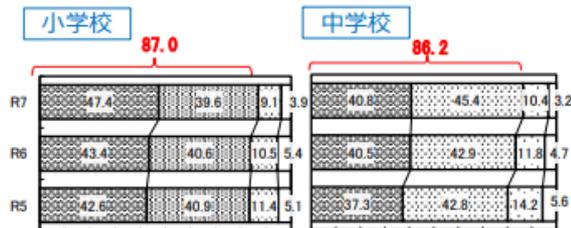


ウェルビーイング

◆ 「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童生徒は85%以上で、微増。

自分には、よいところがあると思う

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない



自分には、よいところがあると思いますか (小学校)

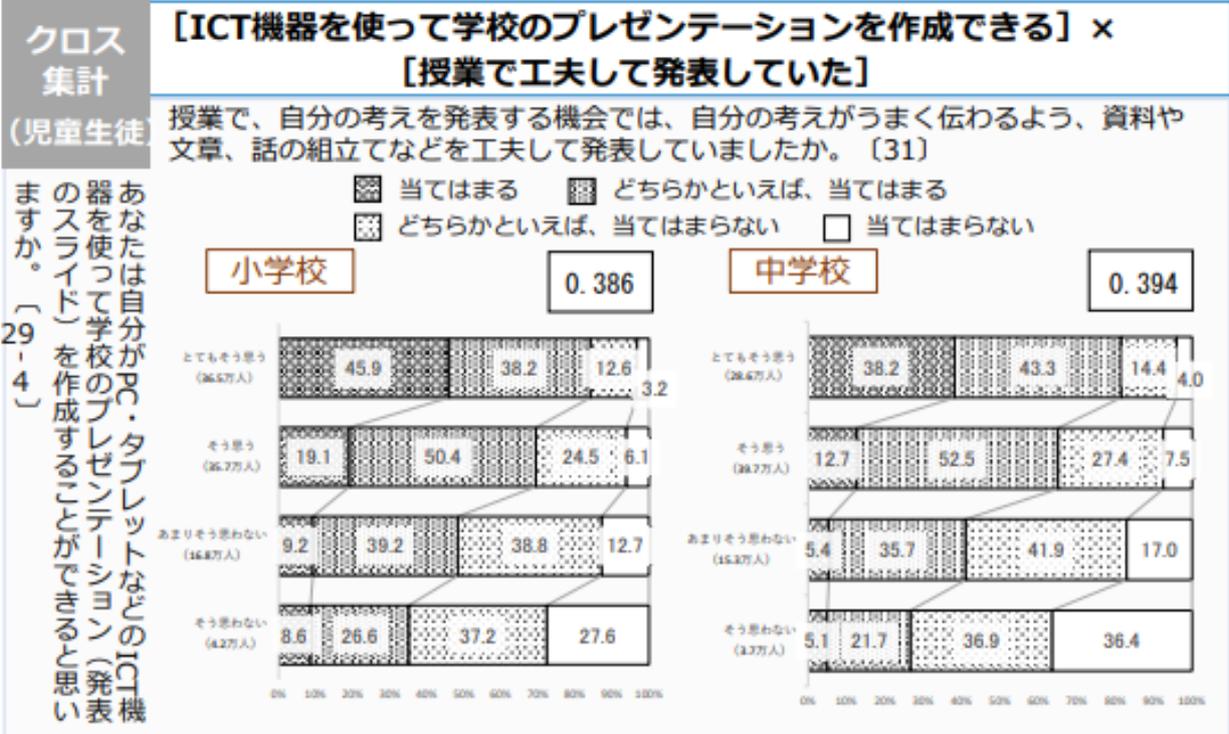
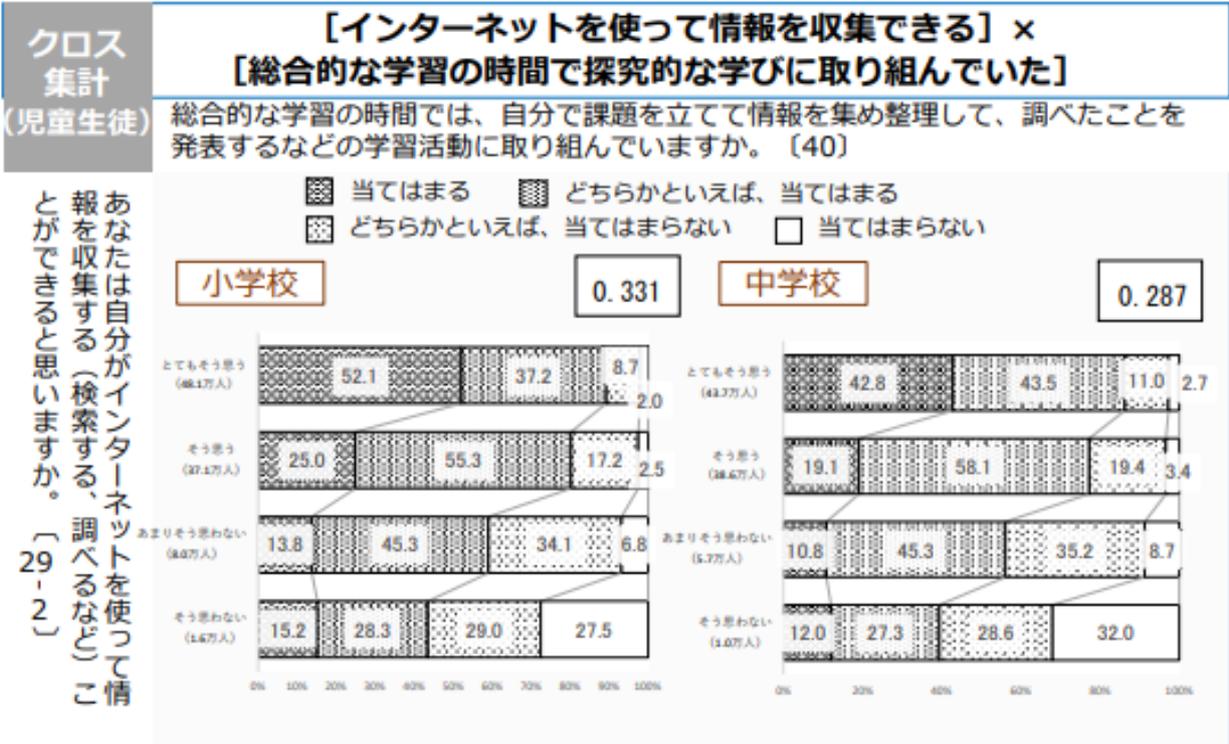


町田市

自分には、よいところがあると思いますか (中学校)



児童生徒の主体的・対話的で深い学びに関する回答と児童生徒のウェルビーイングに関する回答との間には相関が見られる。
 主体的・対話的で深い学びが、児童生徒のウェルビーイングに影響を与えている可能性がある。



クロス集計

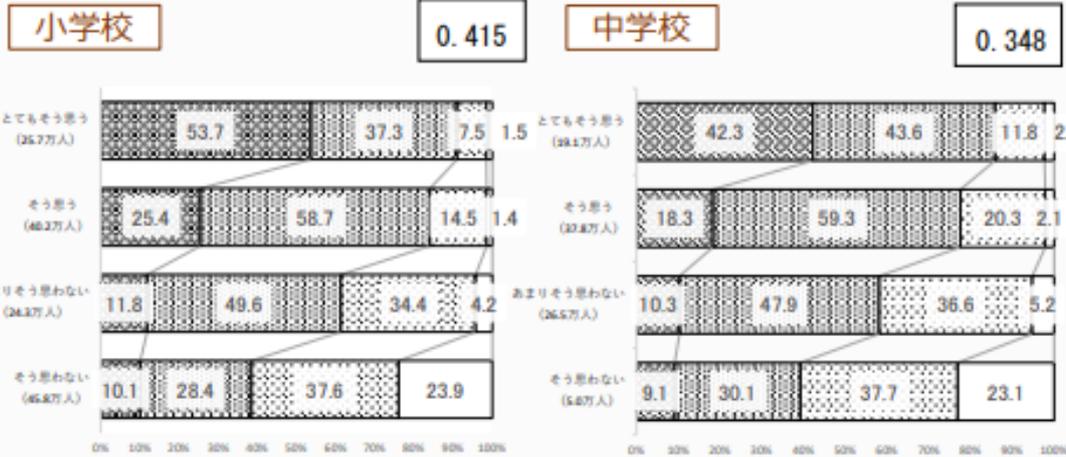
(児童生徒)

【ICT機器を使って情報を整理できる】×
【学んだことを生かしながら考えをまとめていた】

授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。〔33〕

あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ)ことができると思いますか。〔29・3〕

当てはまる
 どちらかといえば、当てはまる
 どちらかといえば、当てはまらない
 当てはまらない



参考

PISA2022では、情報を集める、集めた情報を記録する、分析する、報告するといった場面でデジタル・リソースを使う頻度は他国に比べて低く、「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標はOECD平均を下回っていた。

○高校生自身が情報を集める、集めた情報を記録する、分析する、報告するといった場面でデジタル・リソースを使う頻度は他国に比べて低く、「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標はOECD平均を下回っている。

ICT活用調査「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標

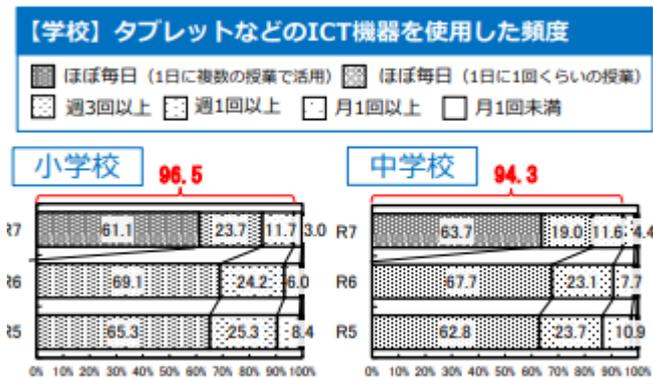
OECD平均	0.01
29位 日本	-0.82

※ ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

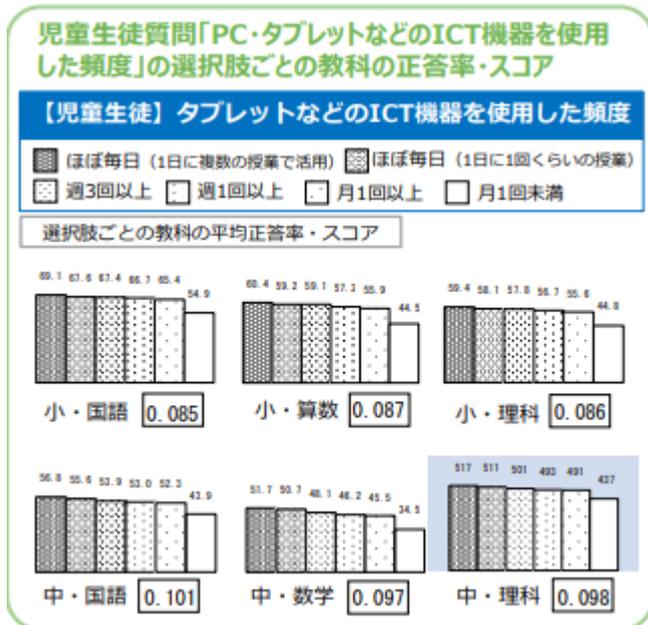
【参考】 OECD生徒の学習到達度調査2022年調査 (PISA2022) のポイント
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

- ICT 機器を活用する自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向が見られる。
- ICT を用いた探究型の教育の頻度は日本は OECD の平均を下回っている。

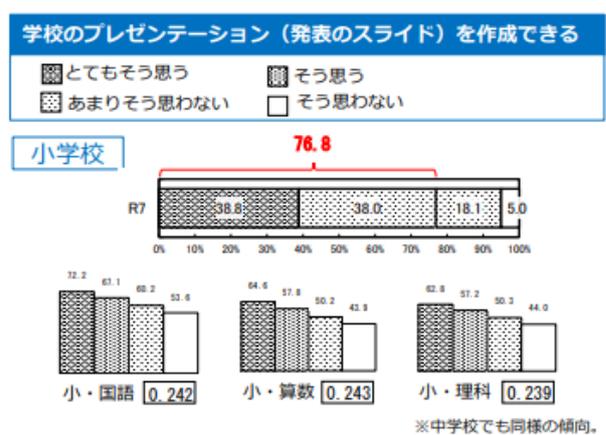
- ICT機器を「ほぼ毎日」「週3回以上」活用する学校は、小学校97%、中学校94%。



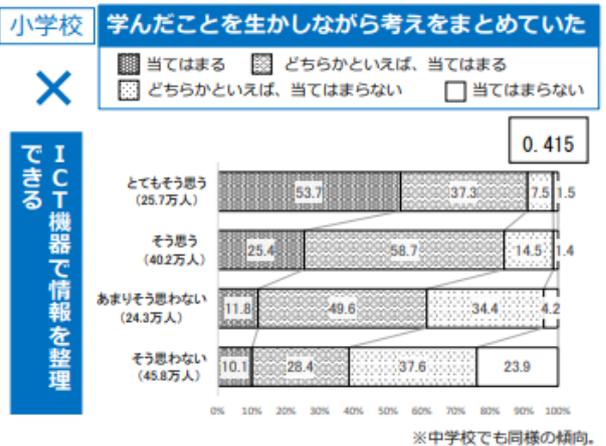
- ICT機器を使用する頻度と各教科の正答率・スコアとの間に、一定の関係が見られる。



- ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向。



- ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している。



ICT機器で情報を整理できる

- ICT 機器を活用する学校は小学校、中学校ともに90%を越え、日常的な活用がなされている。
- ICT 機器を活用する自信がある児童・生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い傾向がある。

調査結果分析に基づく町田市教育委員会の取組

- 調査結果を踏まえ、昨年度に引き続き、授業改革推進委員会において、「課題の解決に向けて、児童生徒が自ら考え、自ら取り組むことができる授業」を目指し、「自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動」を多く取り入れた授業実践を行い公開するとともに、デジタル版実践事例集や、動画を作成して、各学校で授業改善の参考資料として活用するように周知する。
- 2025年度に全校実施した授業改革研修に基づき、学び続ける力を育む授業の推進を図る。その際、組織的な授業改善や PDCA サイクル化を図るよう教務主任会や研究主任会、若手教員育成研修等で周知していく。
- 各学校で作成した「授業改革推進プラン」に基づき、教員及び児童生徒を対象に実施した市独自の ICT 活用状況調査の結果を指標として確認してもらうようにする。
- 家庭学習の充実に向けて、「Machida Next Education【家庭学習編】」を改訂するとともに、学習習慣の確立や定着、読書活動の推進や ICT を活用した家庭学習における学びを推進する。